

第二十八回学術大会発表要旨

キエルケゴールの信仰観についての一考察

——「反省のあとの直接性」とは何か——

(筑波大学大学院) 鈴木 祐丞

キエルケゴール(一八一三—一八五五)は一八四八年の日記において「信仰とは反省のあとの直接性 *Unmittelbarheden efter Reflexionen* である」(Pap. III, A 649, 650)と述べている。そして、「反省のあとの直接性」は、到達されるべき信仰の境地を表したも
のとして少なくとも同年以降彼の生と思想を先導したと考えられる、重要な概念である。ところがキエルケゴール自身は「反省のあとの直接性」の意味を直接的に明らかにしておらず、その概念の解釈は研究者に委ねられている。そこで、本発表では、こうした「反省のあとの直接性」とはどのようなものか明らかにすることを試みた。

まず、本発表では、『ヨハンネス・クリマクス、またはすべてのものが疑われねばならぬ』の一節(Pap. IV B, 144150)で「直接性」と「反省」が規定されている点に着目した。同箇所によると、「直接性」とは「非関係性(矛盾のない一項の状態の自己)」のことであり、また、「反省」とは「関係の可能性(矛盾しあう二項が自己のうちに現れた状態)」のことである。そこで、これらの規定をもとにすると、

「反省のあとの直接性」は、「関係の可能性(矛盾しあう二項が自己のうちに現れた状態)のあとの非関係性(矛盾のない一項の状態の自己)」と規定されることになる。

それでは、このように規定される「反省のあとの直接性」が指し示す信仰の境地とはいかなるものか。そこで、本発表では、このように規定される「反省のあとの直接性」が「死に至る病」の自己論においては何を意味することになるかを考えることで、この問いに答えることを試みた。まず、「直接性」とは、自己が、自らのうちに永遠なものを有していることについての知識は持ちながらも、永遠なものに何ら価値を置かず、時間的なものだけに価値を置いているという意味で、矛盾のない一項の状態の自己のことと考えられる。

次に、「反省」とは、時間的なものだけに価値を置いて生きている直接性のうちにそれは矛盾しあう永遠なものもまた価値を置かれるべきものとして現れるようになるという意味で、矛盾しあう二項が自己のうちに現れた状態のことと考えられる。そして、「反省のあとの直接性」とは、こうした「反省」から、時間的なものに置かれる価値をなくし永遠なものだけに価値を置いて生きようとする方向性を行きつくしたときの自己、すなわち、永遠なものに絶対的な価値を置くという意味で矛盾のない一項の状態となった自己のことであると考えられる。信仰の境地たる「反省のあとの直接性」とはこのようなものと考えられるのである。

カントとルソー再考

(筑波大学大学院) 近藤 里奈

カントが一七六〇年代に「ルソーが自分を正してくれた」と述べたことから、ルソーがカントにいかなる影響を与えたのかを知ることがカント倫理学の成立を知る鍵とみなされ、これまで多くの研究者たちによって論及されてきた。本発表では、まず従来の代表的な解釈である「良心」概念への影響という説を再検討し、この説の不十分さを指摘した(一)。次に「完全性」概念への影響という説を検討し、この解釈が妥当であることを確認した(二)。最後に「良心」概念への影響という前述の論点について、カントのその後の思想展開との関係で、もう一度その意味を問い直した(三)。

グールヴィッチやフェルスターは、ルソーの『エミール』における良心概念がカントの思想に影響を与えたと主張する。しかしながら、ルソーは『エミール』で良心を「善悪を誤りなく裁くもの」と捉え、良心の無謬性を主張するのに対し、カントは一七七〇年代にも「良心の誤謬はめったに悟性だけから由来することはないのであって、良心からも由来する」(XXVII,197c)と述べており、少なくとも良心の無謬性に関して両者の見解は異なる。それゆえこの時点ではルソーがカントの良心概念に決定的な影響を与えたと断定することはできない。

一七六〇年代を経て変化したのはむしろカントの「完全性」概念である。フォルシュナーは、一七六〇年代初めにカントの「人間学的転回、より適切には主体性への転回」があったとし、存在の全体の秩序の中に位置づけられたヴォルフ流の完全性概念から、主体の道徳的自由の中で無条件的に実現されるべきである完全性概念への転回をカントの内に見出す。こうした転回のきっかけを与えたのは、ルソーの「完成可能性」ないし「自己完成能力」の見解であるように思われる。ルソーによれば、「自己完成能力」は人間を動物から区別させる特質であり、人間が動物と異なるのは人間が自然の命令に服従するか否かを決定できる点にある。つまり、人間は自分の完全なあり方を、自然によって定められているのではなく、自分で決めることができる。ルソーはカントに、人間が個人として自由に自らの完全性をめざして生を追求しうることを気づかせたのである。

先に確認したように、カントは六〇年代以降もルソーとは異なる良心の可謬性に言及していたが、九〇年代になると一転して『宗教論』や講義等において良心の無謬性を主張し、その点ではルソーに接近したように見える。しかしルソーが良心を「感情」とみなしていたのに対して、カントは最終的には良心を「理性」によるものと捉える。カントにおいて良心概念は批判哲学が確立した後で初めてそれにふさわしい位置を獲得できたものである。良心概念に関してルソーからカントへの影響があったとすれば、それは六〇年代に良心概念が「与えられた」のではなく、「課せられた」というべきではなからうか。

キルケゴールにおける「弾力性」の思想

（筑波大学） 馬場 智理

キルケゴールの実存思想をめぐる近年の論点の一つとして、他性を有する存在としての他者との関係性が問われている。周知のように、キルケゴールの主張する実存は、「主体性」、「単独者」といった概念で特徴づけられている。これらは、不安や絶望に直面する自己を宗教的に基礎づけ直すキルケゴールの試みの中核的概念である。だが、実存の主体性や単独性が宗教的關係において規定されているという、まさにそのことに対して、それらの特徴が、倫理的領域における他の人間への配慮を欠いているのではないかという批判もなされることになる。

実際のところ、キルケゴールは『おそれとおののき』の中で、宗教的命令に応ずるために倫理的規範の犠牲を容認する「倫理的なものの目的論的停止」を主張している。ただし、ここで注意しなければならないのは、それが、倫理より宗教が価値的に上位にあることを主張するものではないということである。倫理的領域において実存と他者との関係を問うならば、それは個人か共同体か、実存か社会かといった社会的関係における態度決定という社会存在論的問題となる。そこで議論されるのは、自己と他者の理念的な社会的関係

であり、いずれにせよ実存は、そうした関係の中で「主体的」であることが求められることになる。しかし、キルケゴールは、そこで掲げられる「理念」そのものが有界的人間による規定にすぎないがゆえに、かえって他者の他性を見失うことになっていることを指摘する。彼は他方で、人間の思惟を超えた他者としての神との緊張関係において実存を規定する。そこで彼が宗教に見いだす意義とは、「他性を有する他者との関係とはいかなるものであるのか」を実存的人間に知らしめることである。実存が他性を有する他者との関係において規定される存在であるとするこのような解釈に基づいてこそ、宗教と倫理の関係、そこでの主体性や単独性についてのキルケゴールの主張が明確になるのではないか。

キルケゴールの実存思想が、あらゆる理解を理性的人間の思惟に基づかせてきた近代哲学への批判から生じたとすれば、人間の側からの思惟を徹底して拒絶する存在として措定される神は、まさに宗教的他者と呼んでよい存在である。そこで、本発表では、そうした宗教的他者としての神と実存との関係の特徴として、キルケゴールが表現した「弾力性」という考えに着目し、他者との関係にある実存の在り方を明らかにした。

CMC空間におけるリアリティ構成

——多元的現実論を手がかりに——

(筑波大学大学院) 今井 信治

本発表では、コンピュータを媒介したコミュニケーション空間であるCMC空間 (Computer Mediated Communication Space) において宗教が立ち顕れる可能性について考察を試みたい。そのために、現在CMC空間で行われている宗教儀礼と、それに対する諸宗教の反応などを鑑み、リアリティを巡るP・バーガーら現象学的社会学派の多元的現実論を用いてCMC空間のリアリティ構成について言及する。

CMC空間の持つ特性は、「遠隔性の除去」を焦点とする従来のメディアとは異なり、メディアそのものが空間や場として捉えられているところにある。こうした新旧メディアにおける特性の差違を踏まえて宗教との関わりを論ずる際、参考となるのはA・カラフロツカによる「Religion on/in cyberspace」という二分法であろう。これによると、サイバースペースは宗教情報を配信する道具として捉えられるのか、それとも、サイバースペースを環境と捉え、その内部で起こっている宗教現象を取り扱うのか、ということになる。

そもそも、情報技術のもたらす全能感への信仰とも言えるものはカリフォルニアン・イデオロギーと呼ばれ、ネットの普及以前から

ネオ・ペイガニズムやウィックアンというニューエイジ集団と強い結びつきを見せている。そして、いわゆる伝統宗教も、ここ数年でバーチャル参拝や「セカンドライフ」を用いた礼拝といったシステムを整え始めている。こうした潮流は、CMC空間において、宗教情報の流通のみならず宗教実践も取り扱われるようになったものと考えられるだろう。しかし、そうしたCMC空間での儀礼に対し、伝統宗教が疑義を唱える向きもまた存在している。

その議論を要約すると、「場の真正性」と「人と人との繋がり」がCMC空間では失われるため、ネットを現実世界での信仰の足掛かりに留めるべきというものである。実際、現実世界に確固とした宗教的資源を有している組織がその複製をCMC空間においても、ベンヤミンの言う「アウラの凋落」は免れ難いだろう。同様に、現実世界に軸を置いた「繋がり」をCMC空間に移し込むことが、そのままCMC空間内での信仰共同体の成立になるとは考え難い。

こうした問題設定に対し、今日、ネットの双方向性の高まりに合わせて喧伝されるネット・アディクションに着目したい。現実と仮想という二項対立の逆転がネットアディクションによつて起こることを、加藤晴明は「リアリティの位相反転」と呼ぶが、本発表では、多元的現実論からの応答を試みることで、そもそもの現実が多様性を有していることについて言及する。そして、CMC空間に参画する諸個人が、各自の志向する「現実」の元で「重要な他者」を見つけ、真正性を担保する体験が共有されることにより、アウラの保持された「Religion in cyberspace」が成立する可能性を示唆する。

尊王攘夷思想

——水戸学から吉田松陰へ——

(筑波大学大学院) 張 惟綜

明治維新を促した重要な思想的源流として尊王攘夷思想が挙げられる。周知のように尊王攘夷を系統的に構築したのは水戸学である。水戸学は為政者の立場で尊王攘夷を唱道することによって幕藩体制の封建秩序を再強化しようとするものだと思われる。しかし、水戸学が論ずる幕府存立の拠り所の天皇は逆に幕府を否定する論拠になりうる。水戸学から多大な影響を受けた吉田松陰（一八三〇～一八五九）はまさに水戸学の尊攘思想を摂取し、さらに独自の尊攘思想を築き上げて倒幕の思想を形成した人物である。本発表は水戸学の尊王攘夷思想を究明するにとどまらず、水戸学を受容した松陰が、如何に個人の主体性を重んずる尊王攘夷論を展開したかを明らかにしてみたい。

まず、藤田函谷（一七七四～一八二六）の「正名論」を取りあげ、水戸学の尊王敬幕の思想を論ずる。函谷は儒学と記紀神話とを結びつけることによって幕藩体制を護持することを説きながら日本民族の優越性を創出しようとした。こうした函谷の思想を継承した会沢正志斎（一七八二～一八六三）は、さらに神道の思想を導入し天皇に祭祀を司らせることによって、民衆の宗教的な信仰を喚起し民心を統合しようとした。彼は日本神話を巧妙に儒学の五倫で説明する

ことよって日本が他国より卓越した論理を展開している。正志斎より国学に傾斜している藤田東湖（一八〇六～一八五五）は「弘道館記述義」においてさらに神話の部分重視し、それを道の根源と解釈しようとしたのである。以上の水戸学の学者の間には、それぞれの思想に微妙な相違が存するが、執政者の視座から尊王攘夷を論ずる点は共通しているといえよう。

次に吉田松陰と山県太華の論争を一瞥し、水戸学を信奉する松陰の姿勢を明らかにする。日本神話の非合理性に着目した太華の論難に対し、松陰は「論ずるは則ち可ならず。疑ふは尤も可ならず。〔中略〕臣子の宜しく信奉すべき所なり」と宗教的な態度を表明している。さらに『講孟余話』における倒幕に関する箇所を取りあげ、天皇の勅命を奉ずることによって、征夷としての職責を果たせない幕府を覆すことを是認するという松陰の考えを説明する。最後に「江風山月書樓記」を論究することによって、松陰の尊攘思想における個人の主体性「去私」の展開を説明してみたい。

松陰は水戸学との邂逅によって日本の歴史に関心を向かわせるようになった。彼は日本の歴史から過去の既存を学ぶことにより、現時点において未来に向かって新たな歴史を創造しようとした。彼は個人の主体的な営為によって尊王攘夷を推し進めようと努めたのである。それは、日本民族の歴史を理解した上で「去私」を最大限まで行うことよって自らの身命を顧みずに尊攘事業を敢行する、ということではなからうか。事実、こうした松陰の主体的な姿勢に感化された志士は彼の精神を受け継いで明治維新の歴史を創り上げたのである。

懐疑論の問題とその解決

(筑波大学大学院) 江口 貴将

懐疑論および懐疑論にまつわる問題がどのようなものであるのかをある程度明確にし、懐疑論の問題の解決への可能な道筋の大きなパターンを提示することが発表における私の目的であった。

発表時の議論を要約すると、まず初めに懐疑論を分析し、過小決定 (underdetermination) と反省という二つの要素から一般的に懐疑論は構成されていることを指摘した。続いてこの分析の含意として、懐疑論の問題がいわゆる権利問題であること、および懐疑論 (発表で扱ったものは外界の知識についての懐疑論) と懐疑的仮説 (発表においては観念論) を支持する立場を明確に区別せねばならないことを述べた。

懐疑論の分析とその分析の含意という二つの段階を経て、懐疑論の問題は過小決定により同一の証拠から実際に生ずる複数の両立しない知識主張の内定特定のものを受け入れ、それ以外のものを受け入れてはならない理由をどのようにして与えるのかという問題として特定された。問題のこの特定から言えることは、問題の所在は経験的証拠と信念の間にあるギャップであるということであり、した

がって、そのギャップを埋めることが問題の解決になるということである。ギャップを埋める方法としては、最善説明への推論や確率に訴えて帰納的推論を正当化する方法、もしくは超越論的論証によって結論の真理性を確立する方法という二つの方法を挙げた。しかしこれら二つの方法以外にも、懐疑論を正しい議論として受け入れるという問題解決の方法もまた生きたオプションでありうることを主張した。

懐疑論の問題とその解決についての以上の議論の内容のより具体的な把握のために、懐疑論の問題と構造を共有すると思われるネルソン・グッドマンの帰納の新しい謎と上述の懐疑論の問題との関連に言及し、また、懐疑論を受け入れることによる問題解決の具体的事例として過小決定の議論に基づくタイプの科学的反実在論を挙げた。

以上の議論の総括として、懐疑論の問題は帰納の問題として捉えられること、懐疑論を受け入れるという選択肢も真剣な考慮に値すること、および懐疑論は「悪霊仮説」や「絶対確実性という不可能な目標の追求」とは何ら本質的つながりがないこと、これらのことを結論として述べた。

「有への問い」の成立過程についての一考察
——ハイデッガーにおけるアリストテレスと現象学——

(共栄大学) 岡田 道程

フランツ・布伦ターノの学位論文『アリストテレスにおける有るもの多様な意義について』によって点火された「有への問い」は、ハイデッガーの思索にとつて生涯に亘る「決定的な問い」となった。その際、*to on legetai pollaxos* すなわち「有るものは多様な仕方で行われる」という命題に導かれる有るもの多義性に関するアリストテレスの解釈が、取り分け重要な役割を果たしているのであるが、それによれば、ハイデッガー自身の思索の道を規定する問いは、有るもの多様な意味を貫いて支配している有るもの単純で統一的な規定、すなわち「有における多様なものに属する単純なものへの問い」(*die Frage nach dem Einfachen des Mannigfachen im Sein*)である。この問いは、「数多くの転倒、道を間違える」とと途方にくれた状態を経て、「二十年後の論稿『有と時』(*Sein und Zeit*)へと結実するが、この過程における最も重要な出来事の一つは、現象学、取り分けフッサールの現象学との出会いと対決であったことは、彼の回想からも明らかであろう。その際、ハイデッガーはその都度ギリシア哲学、取り分けアリストテレスの哲学へ遡ることによって、現象学を

自分のものにし、独自の方法概念として確立しており、同時にそこから、後年の思索にまで繋がる幾つかの決定的な「洞察」が導き出された。

発表ではまず、(1) 有への問いとアリストテレスにおいて、布伦ターノの著作を介してアリストテレスによって点火された「有るもの多義的な意味」とはいかなる内容を持つのか、そこからハイデッガーの思索にとつてどのような問いが呼び起こされたのかを確認する。次に、(2) 有への問いと現象学において、フッサールの、取り分け「超越論的意識」や「意識に属する対象性」をこととする現象学の「事柄」との対決、及びそこから導き出された「アレーティア」(*Alētheia*) すなわち「現前するものの非覆蔵性」(*die Unverborgenheit des Anwesenden*) に関する決定的な「洞察」について検討する。そして、(3) 有への問いと思索の課題では、最初アリストテレスによって導かれた「有への問い」は、バイノメノン (*phainomenon*) とロゴス (*logos*) のギリシアの意味に立ち返って解釈し直された「現象学」の新しい方法概念を獲得するが、その背景には、デカルトの *Ego cogito* (「我思う」) に遡る主観性の立場を脱却し、意識という基盤にして媒介を経る以前の現象それ自身の原初的なあり方へと遡行しようとする意図が含まれていると言えよう。その意味で「現象」そのものへの探究は、主観性とは区別された「現有」(*Dasein*) の解釈と密接に対応しているのである。

ポストモダンにおける公共性の問題

(筑波大学) 五十嵐 沙千子

「公共性」とは、誰にでも耳慣れた言葉である。普段われわれはあまりにも簡単にそれを口にするし、またあまりにも簡単にこの言葉はわれわれを規範づけてもいる。いわく「電車は公共の乗り物だから電車の中では化粧をしてはいけない」、またいわく「公園は公共の場所だからゴミを捨ててはいけない」などが、例えば「公共性」によって導かれるわれわれ共通の：誰にでも納得されている＝誰をも縛っている：規範である。

だが、はたして「公共性」とは何か。

あるいは、「公共性」という理念が、われわれの社会の規範を根拠づける力能を与えられているのはいったいなぜなのか。

またあるいは、「公共性」によって共通の規範を根拠づけているわれわれの社会に、本当に公共性は存在するのか。

本発表は、まずハンナ・アーレントの公共性概念の分析を通して、こうした問題の所在に接近し、ポストモダン社会における「公共性」の位置価値について明らかにすると同時に、われわれが普段依拠し

ている「公共性」がはたして真に「公共性」足りうるものであるかどうかを検証する。さらに、それを、ユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション論を通して批判的に再構築し、われわれの社会において真に「公共」の＝誰にでも開かれた空間はいかにして可能となるのか、その可能性の条件に接近することを試みたものである。